

# 慧均撰四論玄義八不義について（二）

——大乘玄論八不義との比較対照——

三 桐 慈 海

一

慧均の八不義は既に散佚してて続藏所収の四論玄義の中にはみられないが、その名は古くから日本における三論の学者の間に知られていた。それは三論宗の祖とされる隋の嘉祥寺吉藏の大乘玄論のうち卷二の八不義の撰述について疑いを持たれていたからである。その疑義とは、八不義の文章が他の吉藏の著述と似ていないこと、吉藏は体仮を許すのに八不義には許していないこと、「均正師の十二卷章八不義に云く」として引用している文が大乘玄論八不義の文と同じであること等が挙げられている。八不義の撰者が慧均ではないかという疑義はひいては大乘玄論の成立に関する問題にまで波及することになる。ところがこの慧均の八不義が初章中仮義と共に、近年に本学の横超慧日教授によって発見され、「新出資料・四論玄義の初章中仮義」（印度学佛教学研究13所収）「四論玄義の初章中仮義」（岩井博士古稀記念論文集典籍論集所収）の二篇の論文においてそのあらましが解説されて、「八不義は吉藏撰の大乘玄論所収八不義と酷似し大乘玄論との関係を考察する上に重要なものである」と紹介されたのである。この論文には論題が示すように新出資料の形態が説明され、殊に初章中仮義は四論玄義の冒頭におかれて重要なものであるとして、中仮義の解説に力点がおかれている。この初章中仮義も吉藏の大乘玄論や中論疏の中で言及されており、また室町時代頃ま

では流布していたとされていながらも現在では散佚して見るのできなかったものである。

今しばらくこの二篇の論文によって新出資料の注目したい点を挙げてみよう。まず形態についてみるに、(1)、巻一の首題の下に「均正撰記」と記されているが、均正とは慧均僧正のことである。慧均の伝記は知られていないが初章中仮義や佛性義の記述によると、初め成実論の研究者であったが後に興皇寺法朗の門に入って三論を研鑽し、同門の吉藏とともに会稽にいたと推定される。(2)、両巻ともに首題と尾題を有し、

大乘四論玄義記卷第一(首) 初章義一(尾)

大乘三論玄義記卷第二(首) 大乘玄義八不義第二(尾)

となっている。また統藏所収の四論玄義にみられる原題も「大乘三論玄義記卷第五 二諦義(首)」 「大乘三論感應義第四(尾)」 「二智義記卷一(尾)」 「無依無得大乘四論玄義記 第一三乘義 第二莊嚴義 第三三位義(首)」とあり、このように題号が一定していない。そして二智義は巻一とあるところより初章中仮義と同巻であったのであろう。(3)、各篇の中に引用されている篇名を調べて、成立の相互関係を推定すると、二諦義・八不義・中仮義は早く二智義・断伏義が遅い時期になる。(4)、巻末の「顕慶三年」の識語は統藏所収のものと同文である。また巻末には「撰泉堺威徳山常楽寺」の黒印があり、覚州が所蔵していたと思われる。以上がその要点である。このうち(2)については三論玄義記といわれるものと四論玄義記に大別されるようであるが、これは内容からくるものであろうか。或は(3)の前期と後期の区別に関係があるのであろうか、いずれにもせよ留意しなければならない問題のように思われる。

初章中仮義の内容については本稿の主題ではないので略するが、中仮義研究の意義については次のように指摘されている。同じ法朗の門下でありながら、慧均は初章中仮が中道を体得するための三論宗の基本的な教義であるとして重視する。それに対して吉藏は彼の著作の処々に中仮師批判を行い、殊に中論疏卷二の八不義を積するなかでは「若守初章中仮者、是中仮師耳」<sup>④</sup>と中仮に固執する者を破斥しており、したがって慧均もまた吉藏の批判の対称とならざ

るを得ないことになる。このような相違が生じた原因としては、吉藏は若くより法朗の下で空観教学を専らにしており、慧均は初め成実・毘曇等の研鑽を積みその後三論の門に入ったという体験上の相違よりくるものであろうことが考えられると着眼されている。そしてそれだから慧均と吉藏の学説はほとんど両者区別できないほどの近似を示しながらもそこに一線を画しているのであり、その相違点を探る重要な資料として初章中仮義研究の意義が認められ、またその近似性のゆえに却って散佚の理由となったことが説明されている。これらの事柄は今ここで八不義の検討を進めるに際しても、両者の相違点を明らかにしえる重要な鍵として注意しなければならないであろう。

八不義については従来から撰者に疑義があること、新出資料と大乘玄論の八不義との間に小異はあれほとんど一致することの指摘に止っている。中論の初偈に述べられた八種の否定の語は、特にそれが論主の帰敬偈であることに由って、中論の始終を貫ぬく根本義であると考えられてきた。したがって八不の意義を説明することは大乘般若の根源を説き得ることになる。龍樹提婆の三論を所依とする者にとって、八不義は群經の深奥に入り諸論の広大に通ずる根本的な課題として重要な教義なのである。吉藏が南北朝時代に盛んに行なわれた多くの佛教々義を体系化し、三論教学を大成し得たのは、彼が言教二諦説という独自の論理構成を発見したことに由るもので、大乘玄論の冒頭に二諦義が置かれている意味もそこにあると思われる。その吉藏が八不については二諦を正すものとし、衆教之宗帰群聖之根本・祖中之祖であると述べている。これよりしても二諦義に続いて八不義を位置づけていること必然の理であろう。幸い四論玄義に二諦義があり吉藏に二諦章と大乘玄論二諦義があつて相互の比較研究は可能であつたが、今また横超教授の指示により新出資料の八不義を手にすることができたので、吉藏の中論疏の中の八不義や大乘玄論八不義との比較検討の機会を得ることになった。そこで先ず慧均の八不義と大乘玄論八不義の比較を行い、次に中論疏との思想的な差違を検討し、その上で二諦義や他の章との間の諸点を明瞭にすることによって八不義もまた明らかにされるところと思われる。本稿はその一部として八不義の対照と若干の考察を行なったものである。

## 二 八不義の対照表

既に指摘されているように、慧均の八不義と大乘玄論の八不義とはほとんど文章が一致する。ここでは大正大藏經第四五卷所収の大乘玄論卷第二、八不義（大正四五・二五—三五）を底本とし、それに慧均の八不義を対照させる方法をとった。したがって一線の上が大乘玄論の文であり、下が慧均の八不義による異同である。

改行ごとの数字は大正藏經第四五巻中の頁数、a b c は同じく上中下段、( ) 内の数字は行数を示す。また、蓋(ナシ)は大乘玄論には「蓋」の字があるが慧均の八不義にはない、既八(八ナシ)は「既」はあるが「八」がないことを意味する。(二箇処)は大藏經の同じ行の中に同じ字の二箇処に異同がある。(論ハ説ノ傍)は説の字の傍に論の字が記るされているの意。慧均の八不義には行間に文字が本文と同じ筆体で記入されている。脱字を補ったものであることが明らかな場合を除いて、書写をした人の注記なのか補字であるかが不明である場合に注記した。なお慧均の八不義には句読点はなく、また対照指示に不便なため、大正藏經の句読点は一切無視した。したがってこの表は読み方を念頭に入らずただ字句の異同のみを記載したものである。印刷の都合上一部当用漢字を使用した。

25 a、(題大乘玄論卷第二—大乘三論玄義記卷第二) (3) 雜問—雜簡 (4) 明不有—簡不有有 (5) 意者—意所言、蓋(ナシ) (6) 經云—經第五局云 (8) 經—瓔珞經 (9) 出—去 (10) 滅也又—滅也論初云不生不滅不常不斷不一不異不來不出也又、非與—非之與、名—者

52 b、(1) 明—釈、非有—(有ナシ) (5) 是百—百是 (7) 經之—經意 (8) 成論—成実論 (10) 失—失之 (16) 即—則 (18) 不亦—亦不 (20) 故以—以 (23) 論末—論云末 (24) 無有有—無有我 (25) 不義不義—不義

25 c、(1) 皆—悉 (2) 為深義深義—為深為深義 (3) 諸—(ナシ) (5) 亘十方横通三世堅—堅百一十方横通三世 (6) 真理—

真諦理 (8)言有理一言理 (15)(20)成論師一成実論師 (21)諦中——諦論中(二箇処) (22)者——(ナシ) (23)也——(ナシ) (24)一柱攬四微——攬四 (25)一故不——一不 (27)道——也、仮不——仮解不 (28)前玄——前云、続仮——相続仮、終——後 (29)為仮——為仮也

26 a、(4)亦名定待——亦名明定待 (9)真諦中——真諦明中 (12)合中道——合明中道、有有非——有非 (13)合中道——合明中道

(16)作疏——作義疏十四号 (17)二——兩 (18)遍印——遍竟印 (21)体即無——体則無、相即真——相是真 (22)俗雖——俗諦雖 (23)有以——有也以、故也與——故與 (26)非即果——非則果、不——無

26 b、(1)也——(ナシ) (2)汝——如 (6)不二——不一 (7)詔——名 (8)道總——道者總、応中——応是中 (9)二法——兩法、

道若——道也若 (10)中者——中道者 (11)中道者——中者 (15)是妄——是虚妄 (16)箇——箇 (20)義也百——義百 (22)不——無、無為中道——非無中道 (23)佞——伽 (28)応応有——応有 (29)即老即死——即死即老

26 c、(2)誰在——在誰 (3)(4)兩片——兩行片、二義——兩義 (7)法為——法名為 (9)兩名兩法——兩名目二法 (10)耶——(ナシ)

(11)二名——兩名 (12)言安——言中安 (16)二義——兩義 (18)中也——中道也 (21)以——(ナシ) (22)汝仮当——汝仮称当 (23)者——道

(24)自——(ナシ) (25)短不——短於不 (27)於中——於用中

27 a、(8)真諦者——真者 (10)不須——不復 (11)真得云——真云 (11)(12)若寄名名真——若寄名真、之理——之真理 (14)智会——智

即会 (19)——二理兩理 (22)也——(ナシ) (25)処兩名兩——処兩 (28)今云不——今謂亦不、真即是——真是 (29)名則——名明則

27 b、(1)種中——種說中 (2)地論——地撰論 (3)識本——識與阿摩羅識本 (5)熾惱——煩惱、耶名——耶等名 (6)妄想之——妄

之 (14)急——忽、煩惱——煩惱 (16)本即——本既、亦不——亦無 (17)也今——也真諦三藏云真不除或有四義一真如若断或則失世諦二失凡聖過三前有或後脩解方断或四所以所脩之解不円足者由有或故不円滿若真如断或則有四種過失故不断或也今謂不然汝既有真如用解却或者解用亦本有不令本有煩惱如金石一時本有者对人打治不関金用那得名真如用耶亦是二見有所

得也只是不得云違真起妄用也今 (18) 師——(ナシ) (19) 不語不語待語——不語語不語 (25) 不為非不無——不為不無(二箇處)

(27) 說不生——說非生

27 c、(2) 今明——今山門意明 (7) (14) 皆——悉(二箇處) (17) 有生滅——有生有滅 (18) (19) 仮不生、仮不滅、此不生不滅——仮不生滅、非自不生不滅——非是不生滅 (19) (20) 待世諦、仮生滅、明真諦、仮不生滅——待世諦、仮生明真諦、仮不生待世諦、仮滅明真諦、仮不滅 (20) (21) 世諦、仮生滅、既非生滅——世諦、仮生、仮滅、既非生滅 (21) 亦——則、故、非——故、仮不生、非不生、仮不滅、非不滅、非

(22) 為——(ナシ)、句——(ナシ) (23) 合中——合明中 (25) 此生——此、仮生(仮ハ傍)、是不——是、仮不(仮ハ傍) (26) 是則——(ナシ)、是即——則 (27) 是——(ナシ)、明——(ナシ) (29) 也——(ナシ)

28 a、(1) 成実師——成実論師、釈——解 (2) 顧——領 (6) 斷常——常斷 (21) 二乃——二、或乃(二ハ傍) (23) 明——解 (24) 実——異、実——実異 (25) 有——一(二ナシ)、不——一、不可——一 (27) 別若——別名若

27 b、(5) 對——(ナシ)、入——入、是——入、此是 (9) (10) 成論與外道師等——外道與成実論等師 (11) 如——(ナシ)、水——來 (12) 出即——出、則 (13) 即——則是 (18) 有——又 (22) (23) 蛇從穴出——蛇出穴 (27) 二——両 (29) 斷欲——斷等欲

28 c、(5) 二——両 (10) 異外如是——(是ナシ) (12) 須——(ナシ) (14) (15) 二——両(二箇處) (24) 義但——義理但 (26) 是——此是(二箇處) (29) 故——是故

29 a、(2) 皆——悉 (5) 以——與(与ハ傍)、三——中——三種中、也——(ナシ) (7) 不——非、各——合 (12) 非智、非境——非境、非智 (13)

開境智——開智、開境、泯智境——泯境、泯智 (14) 也——(ナシ) (15) 亦有——一、言、緣是故——緣善滅諸戲論、是以 (19) 便非——便智、非 (24) 二也——二諦也、所尋——所而尋 (25) 生故——生智故 (28) 然——(ナシ) (29) 則——是則

29 b、(3) 或——(ナシ) (4) 地亦名——地名亦 (5) 然二——然前二 (6) 前緣——前後 (7) 無內——無因內 (9) 由——申 (11) 也——(ナ

シ) (16) 所第一所至第 (25) 論婦——論故願加威婦

29 c、(1) 變——及 (3) 二諦中道——(ナシ) (6) 歎——難 (7) 二——(ナシ) (8) 言為——言盡言為 (9) 能——即能 (11) 以來——(ナシ)

(13) 減——減 (15) 無出——無有出 (16) 非戲——非是戲 (17) 論又——論也又 (20) (21) 亦得——亦能得 (24) 故為——是

30 a、(2) 者五逆但——者但、惱——惣 (4) 定——決 (5) 也——(ナシ)、見——覓 (6) 則是——即、離——(ナシ) (7) 唯——但、離——

(ナシ) (9) 又——(ナシ) (10) 彼聞——彼師聞(師ハ傍)、怖——恠、而聽——而於聽、所——(ナシ) (11) 覓此——覓知此 (12) 若是——

若見 (13) 便是——此即 (16) 名有——名為有 (17) 得也——得等也、又——故 (18) 也若——也四若(四ハ傍) (21) 故反折論云——故質論

亦名反折論云(質論亦名反ハ傍) (22) 無損——無則損 (23) 是——則 (24) 是戲——則戲 (25) 邪——正 (26) 正——邪、便行——便便行、

苦——與常 (27) 行心——心行 (28) 則戲論師也故——則是戲論師等也又思益經云当來惡比丘有相說法破我正法彼非我弟子我非

彼人師也故

30 b、也——(ナシ)、如五——如相行品云五(相行品云ハ傍)、乘共——乘菩薩共 (3) 出今——出処今 (4) 住無出——住不出、

故非——故並非(並ハ傍) (5) 亦是戲論故——(ナシ) (7) 德——得、乘摩——乘無所得摩(無所得ハ傍)、諸法——諸佛法 (9) 論論

——論無戲論戲論 (10) 等戲——等故經云法本不燃今則無減滅戲(アトノ減ハ傍) (11) 即——(ナシ) (12) 惡——(ナシ) (13) 答須——

答底須 (15) 則戲——則成戲 (16) 也——(ナシ)、即——則 (22) 吼品——吼菩薩品(菩薩ハ傍) (23) 不二——非二 (24) 果與——果也與、

小——少 (29) 烈——列 (27) 教不生不滅——教假不生假不滅

30 c、(1) 而相——而二相 (2) 非有無——非有非無、非亦——(非ナシ) (3) 白——自 (4) 是有無——是有(有ナシ) (7) 也——(ナシ)

(8) 諦中——諦義中 (10) 或——或是、引——拋 (11) 中八——八中、故——有 (13) 処大——処故大、為正觀論——(ナシ) (14) 釈論中論——

釈論與中論 (19) 髓也——髓体也 (20) 名——(ナシ) (22) 云——是 (24) 導所——道於 (26) 答雙——答若雙 (27) 是正——是一正

31 a、(8)此仮——此仮生仮、皆——悉 (16)亦是——亦名為、則——義 (17)明——釈、偈多——偈亦是多 (18)即——則 (20)(21)可為——  
可以為(二箇處) (21)既——既是 (24)林——樹 (25)亦是——亦名為 (25)三——二 (29)云——隨

31 b、(1)次二謂——次也二隨 (2)疾——病、除——治、即說——即為說 (4)法不——法若不 (7)緣在——緣初在、初也——初題也  
(8)流——者 (10)諦欲——諦故欲、申二——申佛二 (11)佛——(ナシ) (12)在論初也——在初提品也 (13)二但——二二但 (13)(14)教之與  
理二與不二——二與不二教之與理 (17)又——(ナシ) (20)並——(ナシ)、言能——言者能 (22)若——(ナシ) (23)耶——也 (25)不八——  
不其八 (26)故——(ナシ) (28)小後說大——小乘後說大乘、說小——唱小

31 c、(2)謂——說、乘道——乘一道、鈍之——之鈍、緣曲——緣故曲 (3)互——(ナシ) (4)論前——論則前(二箇處) (5)明——說、  
実不——実也不、欲說——欲釈 (6)論主——龍樹 (7)乘出——乘中出 (11)法見——法也見 (13)即——亦、緣也——(也ナシ)、也故——  
借不因緣破因緣也故 (15)因生——緣生 (17)非果——非是果 (18)二——兩 (21)及不——非(及ハナシ) (22)二——兩、是因緣——(ナシ)、  
同是——同異是 (26)為因——為因義 (27)亦因——亦緣 (28)緣但——緣義但(義ハ傍)

32 a、(1)何者——者何、則——即 (3)為因緣——(緣ナシ) (5)既八——(ハナシ) (12)能說因——能体說是因(能、是ハ傍) (14)  
二別——二則別也 (17)故名——(ナシ)、剋——剋 (18)正說已——正論說已(二諦已(論ハ説ノ傍、説経——説ナシ) (20)亦有明之  
——明之亦有之、故——(ナシ) (22)止戲論——(ナシ) (23)止不——(不ナシ) (24)止故——止有故、故戲——故有戲 (25)止不——(不ナ  
シ) (28)応掘出掘——応以掘出掘

32 b、(1)離故——離有故 (3)悉戲——悉非戲 (4)亦——(ナシ) (8)即倒——即例 (9)若有——若為有、皆——悉 (10)論常——論有  
常 (14)云謗——云五謗 (16)明——論 (17)相入——相出入 (21)雙說——雙論 (22)二——兩 (23)仮利——仮正言利、人——之 (24)(25)則——  
即(二箇處) (25)有二——兩(有ナシ) (26)也——(ナシ) (27)故——(ナシ)、二義——兩義 (29)說——故、病——徧、堪聞——堪人聞  
32 c、(1)以說——以為說、仮——(ナシ) (6)則——即、有無入——(ナシ) (11)(12)則——即(二箇處) (14)計遣——計隨遣 (18)又——



(ナシ) (19)則—即 (20)複有二—有兩(複ナシ) (23)也—(ナシ) (23)24複仮—(ナシ)、俗—真、複中二不二是真諦—(ナシ) (26)正—是 (27)明—積、二—此 (28)也—(ナシ) (29)義之二—之義明二、還俗—還成俗

33 a、(1)止有無—正遣有無二 (2)尽—遣(三箇処) (5)也又—(ナシ) (13)三從—三明從 (14)入—(ナシ) (23)明單複—

(單複ナシ) (24)複二—複也二 (25)俗單—俗諦單、真單—真諦單 (26)複仮—複仮仮、複非—複仮非 (27)道是俗—道也此是俗、道是真—道此是真 (29)明互—互明

33 b、(1)句第一—句也第 (2)即從—即是從 (3)俗單—俗諦單 (3)4)仮非有—非有仮 (4)俗複—俗諦複(二箇処) (6)有

非有—有—not (7)有仮有非—(仮有ナシ) (16)五從—五已從 (17)無仮無非—(仮無ナシ) (19)無仮不—(仮ナシ) (28)諦—(ナシ・二箇処)、有不—有仮不 (29)諦—(ナシ・二箇処)

33 c、(1)~(9)諦—(ナシ・十二箇処) (4)無第—無也第 (7)非不—不非、說為—說有為 (8)云—(ナシ) (10)說為—說無

為 (11)也—(ナシ) (13)也此—也不有有義相對而解積有十六意也第一不有有者明其道非有非無而結為有故言不有此

(14)故經—(經ナシ) (14)15)宗教—宗教經云以不住法住般若波羅蜜不二故、品第一—品經第、品云—品末、佛云—(云ナシ)

(16)何佛言—何有佛云、(17)為無—為之無、義—若 (18)有者—(有ナシ) (19)然只—然此只 (24)三—(ナシ)、也—(ナシ) (25)

故有—有故 (27)用故—用有故

34 a、(1)也—(ナシ) (2)不有—(有ナシ)、一有—(ナシ) (4)之—也 (6)有故—有有故、此是—此故是 (7)無類—無

亦類 (8)執執—執執者執 (9)有破之—(有ナシ) (11)七不—(不ナシ) (12)皆—悉 (14)有也—(也ナシ) (15)合不—合言不

(17)空故—空有故 (18)爾—然 (19)不於—不不於 (20)有無故—有一切無故 (23)24)義不有自—義明有不自 (25)有不—有而以

不(25)26)類也—類之 (27)之故—之有故 (28)特—持不於一

34 b、(2)爾也——然 (12)廻——乃 (13)五不——五明不 (14)六不——六明不 (18)一章——一第十章 (19)故不——故今合前八意為一不有有不(今有ハ傍) (20)前十——前明十 (22)有不——有不有不、可是——可量是 (24)只——以 (26)若——(ナシ) (27)得果——果得、然——類此

34 c、(1)雖一——雖唯一(唯ハ傍) (3)智——知、即——(ナシ) (4)答言——答若言(若ハ傍)、即——則(二箇処) (13)於無——於可無、可令是無——量是令無、今以——今如世人以莊嚴具莊嚴於人不可此人為非人而莊嚴具莊嚴人人猶名之故今以不持莊嚴有而有以 (14)有——(ナシ)、即——(ナシ) (19)耶——有 (20)次單言有則——次此單言言有即(次・言ハ傍) (21)有非——非有 (22)亦是——有有——亦非是有(非ハ傍)、是是有——是有 (23)豈非——豈不、上自——上有自 (24)故此——故言此(言ハ傍)、即——則 (25)此有——(有ナシ)

35 a、(1)即——則 (6)也——(ナシ) (8)末是——是末 (15)即——則 (16)度——癡、紋——(ナシ) (17)竟亦然——竟空亦爾、也——(ナシ) (18)失不——(失ナシ)、即——則 (19)失不——(失ナシ) (21)也——(ナシ) (22)斂開——開斂 (22)斂——斂(五箇処) (23)二——兩 (24)也——之 (26)但不——不但 (27)壞——懷 (28)也——(ナシ) (29)此——斯

35 b、(2)体——能(傍ニ一字アルモ不明)、尋也——尋之也 (題)大乘玄論卷第二——大乘玄義八不卷第二

### 三

均正の八不義と大乘玄論の八不義とを対照することによって相互に補足し得る箇処は少なくない。概して大乘玄論の方が纏まっているようにも思われるが、一一について検討すると必ずしもそのようには断定できないようである。書写され伝持されていく過程において字句の誤写や脱落はありうることで、慧均の八不義にも行間に補足された箇処がかなりみられ、また対照しながら文に当たてみると脱字と考えられるところもあるようである。このような誤写脱

字はまた大乘玄論の方にも当然あると考えなければならぬであろう。例えば全般にわたっていえることでは「則」と「即」の字のほとんどが不正確であると考えてよいといえることである。ところでこの両者の対照によって表わされた異同のうちには、このような補足訂正とは異なる問題が含まれてはいないであろうか。ほぼ異同の形態は

(一)、用いられている字が違っている。(二)、字句が相互に出入している、(三)、慧均の八不義に所載の文が大乘玄論にはみられない、(四)、字句の前後が顛倒している、(五)、どちらか一方に字句が脱落または増補されている、と五種に大別できるようである。これらの中から注意すべき問題を二三挙げてみたい。

先ず(一)の字句の相違についてはかなり見られるが、語勢の変化は多少みられてもそれによって意味や内容が大きく変ることではないようである。したがってこれは対照表に示される通りである。(二)の字句の相互出入しているものも、それによって意味が変るということはない。二三の例を引いて気付いた点を記してみよう。

#### 第一弁大意、所言八不者は諸佛之中心（慧均八不義）

##### 第一弁大意者、八不者蓋是諸佛之中心（大乘玄論）（表25・a・5）

慧均は章を立てるのに「第一弁大意」としているようで、初章中仮義にも四論玄義の各巻もこれは共通していて、しかも「第二釈名、所言二智者」などの相似した句が処々にみられる。それに対し大乘玄論の「第一弁大意者、八不者」の句は不自然で他に例をみない。大乘玄論では「感応第一」というように章が立てられ、巻二の八不義と巻五の論述五門の各章が違った形式になっている。巻一の二諦義は「二諦者蓋是言教之通詮」と始められているから、玄論八不義のこの冒頭の文は慧均の文に手が加えられたと考えざるを得ないであろう。

有空為真諦仮不生滅(a)、仮不生滅(b)、非是不生滅(c)、待世諦仮生明真諦仮不生、待世諦仮滅明真諦仮不滅(d)、世諦仮生仮滅既非生滅(e)、真諦仮不生滅則非不生滅(f)、故仮不生非不生仮不滅非不滅(g)、非不生非不滅真諦中道也

(h)。(慧均八不義)

有空為真諦假不生假不滅(a)、此不生不滅(b)、非自不生不滅(c)、待世諦假生滅、明真諦假不生滅(d)、世諦假生滅既非生滅(e)、真諦假不生滅亦非不生滅(f)、故非不生非不滅為真諦中道也(h)。(大乘玄論)(表27・c・18～22)

この両者の文は内容からすれば同じであるのに文の纏め方が違っている。大乘玄論に(g)に相当する句がないのは省略されていると思われる。或いは慧均の文が整理されたとも考えられる箇処の一である。これは(表32・a・20)でも同じようにいえるようで、慧均が「明之亦有之」とし大乘玄論では「亦有明之」と簡略になっている。

次に注意したいのは(三)の慧均の八不義にのみ所載の文である。これらは全文を対照表に掲げたので、その内容を考慮しながら大乘玄論に載せられていないことの当否を考えてみたい。先ず最初に取り上げたいのが真諦三蔵の真如説に対する批判の一文(表27・b・17)である。八不義の地論師撰論師の中道を破斥する項では、真如の用についての説が述べられる。阿梨耶識や阿摩羅識は本来は清浄で真如であるが、妄想を起し煩惱に覆われているので如来蔵と名づけられる。それが十地の解を修するに随って煩惱を断除し、そこに真如が顕現されて用をあらわすのでそれを法身という。この真如説に対して三論宗では修解の因によって法身の果を得るといふような法身についての理解を破斥するのであるが、その中で真諦三蔵の真不除惑有四義の説を例に挙げてそれを破斥しているのである。すなわち真諦三蔵の説というのは、真如が惑を取り除くとするならば(1)世諦が説かれる意味がなくなる、(2)凡夫と聖人の区別される意味がなくなる、(3)惑があつてこそ修解があり断惑の行が成立つのにその断惑の意味がなくなる、(4)修解に十地の段階のある意味がなくなる、の四種の断惑と真如について述べたものである。この説に対して三論からするならば、真如があつて解をもつて惑を断ずるとするならば、もともと真如の解用があれば煩惱があるはずがないことになる。金は石に混っているのを人が打治撰別するので金の用によって金が出てくるのではないように、真如の用によって真如が顕現するのではない。地論師等の説は真常断惑の二見有所得であつて、真を違えて妄想に覆われるというような説は成り立たないとするのである。この真諦三蔵の説を批判する文が大乘玄論に載せられていないからといって、地論師

破斥の内容が不明瞭になるということはない。しかし吉蔵が真諦三藏について出家したという僧伝の記述を考え合わせる時、真諦の名を直接に挙げて批判したこの一文が削除されたとも考えられるであろう。

(表25・a・10)の中論八不の偈文は「論初云」として瓔珞經の引用の後に続いて列挙されている。しかしこれは初めに華嚴經の文を挙げて、その内容が「即ちこれ論初の八不」であると述べた後だけに、その引証の場所に当を得ていないように思われる。それに対して八不義の智慧中道を明かすところで戲論非戲論について論じ、有所得の行心こそが般若に乖く戲論師であることを述べるにあたり「惡比丘の有相說法はわが正法を破す」という思益經の引用(表30・a・28)は適切な經証と考えられる。続く(表30・b・10)の「故經云」は維摩經の文であるが、これは直ぐ前(二行前の「諸法本來不生、今亦不滅」の文の經証であって、省略されても差支えはないようである。

次に第六料簡不有有の初めの「故經云」(表33・c・14)の般若經の文は、続く「故大品經」の文の理解の仕方によって置かれる意義が変わってくるようである。ここでは無の所有を宗とする涅槃經と有の所無を宗とする般若經によって不有有の義は解釈されるというのであるが、大品經第三卷相行品の引用文「諸法は無所有なれども是の如く有なり(a)。是の如きの無所有この事を知らざるを名づけて無明となすなり(b)」は、(a)が無の所有を示す文であり、したがって(b)が有の所無とするならば、この文を有の所無を宗とする般若經の經証とはなし得ず、むしろ双方を一經によって經証したと考えるべきであろう。そうであるならば慧均の八不義に「故に經に云く、不住法をもって般若波羅蜜の不二に住す」の文は有の所無を宗とする般若經の經証の文として置かれて然るべきと考えられる。なおその直前の「不有有義相對」の文(表33・c・13)は直後の文と重複しているので不要である。

また同じく不有有の義を説くうちの不有是有の義を説明する譬喩が挿入されている(表34・c・13)が、この譬喩は不有有の一義を理解し易くする。すなわち「世人、莊嚴の具を以て人を莊嚴するに、この人を非人とはなすべからず。而も莊嚴具もて人を莊嚴するに、人なお之を名づくが如し。故に今、莊嚴の有を持せざるを以て而て有なり」とあり、

「不を以て不有なる故に只不有（これ有）なり」と続くのである。人が莊蔽具で飾られてもやはり人であるように、不でもって有を否定したからといって有でなくなるわけではない。この不有是有の義は破斥を聞いても怖れさせないためのものであるから莊蔽人の譬は理解を容易にさせ得るといえる。しかし不有と有を莊蔽人と人の関係で理解すれば差支えないが、莊蔽具と人の関係で理解すると不と有が別体のものとなり、誤りを生ずることにもなるのでその紛らわしさは避けたほうがよいようである。なおこの文の直前の「若以不於可無量是令無而今」の文は読解し難く、大乘玄論の「若以不不此有、可令は無、而今」が明瞭である。

(四)の字句の前後が顛倒しているものとは、誤写なのかどうかということが注意されなければならないであろう。二三を選んで挙げてみよう。

大経云、涅槃之体、非有非無、亦有亦無也（慧均八不義）

大経云、涅槃之体、非有無、非亦有亦無也（大乘玄論・表30・c・2）

この引用文は「非無」と「無非」の相違にすぎないのであるが、その意味内容からすると全く変わってくる。非有非無も亦有亦無も有無と共に四句分別の一であり、「有無に非ず、亦有亦無に非ず」とする大乘玄論は四句を絶している。吉蔵は常に四句百非を絶する無所得を標榜するのであるが、経文に何らかの作為が加えられたのであろうか。<sup>⑥</sup>

このように字の位置が顛倒した箇所は（表25・b・5）「故経中具有百非、即還百是不有無等」（均）、とあるのが「即還是百不百無等」（玄）となっている。これは大乘玄論の文の方が理解し易いようである。また（表25・b・18）「如是深亦不於不」（均）は「如是深不亦於不」（玄）とある。この文は大乘玄論の版本では「是の如きの深不は亦た不に於く」と読ましているが、慧均の文「是の如きの深は亦不を不ず」と読み、少し前の「亦復不於無等」に対応し得るのではないであろうか。これらはあまり内容の上では変っていない。

(四)のどちらか一方に増補脱落のあるものはかなりの量になる。その中には（表27・b・25）の「非」の字のように既

に問題として指摘されているものもあり<sup>⑦</sup>、少しく注意しなければならない。しかしこれらの一一については中論疏の八不義との比較をすすめていく過程において改めて検討をする必要がある、そこで問題にふれたいと思う。

既載の対照表が示すように慧均の八不義と大乘玄論の八不義とは、全体から眺めると全く同じものということができるようである。しかし異同の部分を少しく詳細に検討すると、大乘玄論が慧均の八不義のそのままではない要素が加味されているようにも思われる。それでは既にいわれているような後に吉蔵の門弟によって大乘玄論に編入された折に手が増えられたとみるべきであろうか、或は吉蔵が自ら慧均の八不義を可として取入れたのであろうか、或はまた八不義はそもそも師法朗の著わしたものととも考えられないであろうか等が推測し得るように思われる。そこで次に吉蔵の中論疏によって八不義の思想的な形態を明瞭にしなが、再び慧均の八不義を解明してみたいと思う。

註① 統藏經第七四套第一冊

② 宇井博士は読師道憲の大乘玄第二聽聞抄によってこの疑義に言及されている（大乘玄論解題・国訳一切経）。

③ 典籍論集（一四九頁）参照。

④ 中論疏（大正四二・二八a）。なお同（二五c）にも中仮師批判は述べられている。

⑤ かつて日本印度学佛教学大会において「三論宗と四論宗」と題して口頭発表したことがあるが、次の稿において再び論究を試みてみたい。

⑥ 三論玄義の末尾（大正四五・一四c）に「又中仮師云、非有非無為中、而有而無為仮也」と記されていることから作為が考えられる。

⑦ 国訳一切経・大乘玄論の註四九（同四七頁）等を参照。

（本稿は昭和四四年度文部省科学研究費・総合研究Dによる研究成果の一部である）